

本書は全体としてやや追究の足りない感があり、カエタヌスの場合などいくつかの問題が残る。殊にアナロジアについてはトマス解釈をめぐって異論が生ずるのであるが、叙述のあまりに簡単なのが惜まれる。ともあれ本書は論旨が明解であり、他に類書のない折から有益な研究書である。

哲学大辞典 4 卷, 1957~1958, ガララーテ哲学研究所編 ヴェネチア・ローマ。

Enciclopedia Filosofica. Centro di Studi filosofici di Gallarate. VeneziaRoma (Istituto per la Collaborazione Culturale) 1957—1958, 4 vol. (19.5×28cm) : I pp. XXVII, 1958 col., II pp. XIX, 1916 col., III pp. XIX, 1942 col., IV pp. XIX, 1963 col.

Francisco Pérez Ruiz S. J.

此の著作の対象は、既に表題から分るように、単に中世哲学だけに限られるのではない。しかしこの辞典には中世哲学に属する多くの重要な要素があるので、私は中世哲学の観点から書評を行うことを妥当と判断した。この著作全体についての概観は雑誌「ソフィア」の秋季号にすでに書いたので、ここでは中世哲学と関係する面のみを扱う（ソフィア秋季号1960年344—348頁参照）。

この大きな辞典の監修者 P. Carlo Giacon S. J.(メッシナ市大学形而上学教授)は、イタリアの著名な新トミストである。従ってこの辞典の中世哲学に関係あるすべての問題が充分の注意と配慮とをもって扱われることが予期されたが、実際にこのことは事実となった。すなわちこの辞典の中には、歴史的問題にしても学説的問題にしても中世哲学研究のために重要な多くのものが見出される。そして更に個々の問題のために選択された文献目録が示され、それはイタリア語の書物・論文に限らず、英・仏・独・スペイン語のそれに及んでいる。この辞典の著者たちは、その担当する問題について、それ以前に包括的な著作を書いている場合が少なくない。かくて彼らは、長い研究の結果を集約して我々に示している。

この辞典の配列は多くの辞典のそれと同じである。アルファベット順に、二つの種類に分けられる項目が並んでいる。一つは直接に哲学的問題を考えるもの。

他は哲学者、或は特殊な学派を扱うもの。中世哲学に関しては余り重要でないものを含めてすべての学派について、そして殆んど知られていない哲学者についてすら、多くのことが書かれている。更にしばしば用いられる術語、アフォリズム、表現の教示説明を見出す。

この辞典のすべてを示すことは不可能である。この辞典が中世哲学研究者に何を提供し得るかを或る程度示し得る二三のものを、私は選んでみたい。しかし個々のものに入る前に、或る重要なことを示すべきだと思う。この辞典の著者たちは中世哲学を単に死せるものとは考えていない。彼らは徹底的に歴史的問題を（博識と厳密な方法で）研究するが、単に歴史的ではない。更に哲学的問題としての深い妥当性を考え、示された解決に含まれているあらゆる真実を自分のものとすることに真剣である。この辞典に現われた二つの基礎的な思潮は、(それについては他の所〔ソフィア参照〕で述べた) 中世哲学の基礎的な立場、即ちトミズムとアウグスチニズムとに一致し、両者に深い靈感を求めている。この二つの思潮の現在に及ぶ生命それ自身と力は中世研究の哲学的意味についてすでに我々に何ものかを教えるのである。次に我々はこの辞典が何を提供するかをより具体的にみてみたい。

“Scolastica” (IV454~459), “Seconda scolastica” (IV459~461) と “Neoscholastica e neotomismo” (III874~880) の三つの項目で、我々はスコラ哲学の全歴史の総合的な説明を見出す。第一スコラ学について Sophia Vanni-Rovighi が書いている。スコラ哲学の中には多種類の学説がある。この差異は現実のキリスト教的共通概念を個人的な仕方生き、表現することから起る。従ってこれらの哲学の特徴的な考えを見出すのはなかなか困難である。中世哲学の反対者たちによって与えられた考えは全く受け入れられないが、De Wulf や他の人々によって示された考えも充分なものとは思われないのである。V.-R. はその当時実際に教えられていた哲学を歴史的に考えて行くことを唯一つの可能な道と考える。中世的思索の基礎的な課題は啓示の知解の研究である。V.-R. は中世哲学の形成と進化とに於ける主要な段階と、主要な影響とを説明する。ドゥンス・スコツスは恐らく最後の偉大な総合であって、彼はトミズム以後のアウグスチニズムの要求をアリストテリズムと調和させようと試みた。その後形而上学的関心は次第に弱まり、スコラの思索は余りに空虚な精緻さにふけり、従ってますます生から離れて行ってしまった。

しかし或る時間を経てスコラ哲学の新しい黄金時代が訪れる。この第二スコラ哲学は P. Giacon が扱っている。彼はここでこの問題について出版した三巻の著作 (*La seconda scolastica*. Milano 1944—50) の圧縮した要約を書いている。スコラ哲学のこの時期は15~18世紀にわたり、人文主義、ルネッサンス、近代哲学の第一期と一致する。又カトリックの革新の時期でもある。トリデンチノ公会議の前の主な著作家たちは Thomas de Vio (Caietanus), Franciscus de Silvestri (Ferrarensis), Franciscus de Vitoria であり、一般に聖トマスの忠実な注釈者である。しかし特に重要ないくらかの問題に於てトマスから離れてしまい、殊に問題の根源に忠実に従って究極の結論を引き出さなかった。かくてこれはその当時生れつつあった近代哲学に、スコラ哲学を悪く理解する機会を与えた。トリデンチノ公会議の後ではとりわけイエズス会の著者たちが目立ったが(殊に Suárez), 彼らも又聖トマスの注釈者であった。しかし彼らは思考方法に於ても教示方法に於ても独得であり、新しい時代の要求に対して特別な注意を払ってはいた。けれどもこの新しい黄金時代が衰え始めた時、それはまだトリデンチノ公会議の後一世紀も経っていなかったのである。その原因は P. Giacon によれば、同時代の哲学との接触がまだ不十分であり、主要な形而上学説の忘却であり、独創的な指導的な精神の全く存在しなかったことである。

しかしスコラ哲学のこの第二の衰弱は決定的ではなかった。それは或る時期を経て再び眠りから覚め、今日では強い生命力を示している。この復活を P. Dezza と G. Santinello が述べている。この場合にも著者の研究の圧縮された要約が見出される。というのは P. Dezza はこの時代を長く研究し、それを二つの著作にして公けにしているからである (*Alle origini del neotomismo*, Milano 1940, I *neotomisti italiani del sec. XIX*. 2 vd. *ibid.* 1942—44)。彼の説明から次のことが知られる。スコラ哲学の復興は当局者の勧告の結果ではなく、この勧告に先行するものである。当局の勧告はむしろすでに生まれていた運動を確立し、力づけたのである。いやむしろ逆に始めにはこの復興の運動に対立していた当局者もいないではなかったのであって、それはこの哲学がすでに死せる無用のものと考えられていたからである。この復興運動を起した創始者たちは近代哲学の形成を受け入れたが、その際経験した不満足は彼らを他の場所に真理を求めように導いた。遂に彼らはそれを聖トマスとの接触に於て見出した。そしてそれは我々の時代の人間の嗜好にとって気に入らない形式のもとに、かくれていたのである。彼らが書いた初期の著作は、創始者たちのこの固有の経験を充分に表現してい

る。というのはそれらの著作は論争的なもので、直接にスコラ哲学の真理を弁護するよりもむしろ他の哲学の不充分さを示すことを試みている。かくて人々はそうでなければ容易に選ばないであろうスコラ哲学を研究するように強いられるのである。スコラ哲学は（学派の差異に応じて）基礎的な形而上学的命題に関して明瞭に定められた立場をもっているが、今日のスコラ哲学は研究に開いた態度をとっており、近代哲学の強力な諸学派と論争し、そのすぐれた点を同化することに努め、現代の思弁の特徴的問題を形而上学的に考えることを試みている。

このスコラ哲学の内容とその主な哲学者については、多くのものがこの辞典の中に見出される。その中のただ二三のものを選んで述べてみたい。P. Giacon は“*Aristotele*”（I 339—365）という長い項目の終りに、アリストテレス哲学の三つの主要な一般的解釈の中で、キリスト教中世の精神主義的解釈を示している。そして聖トマスの哲学に対するアリストテレスの認識論的、形而上学的原理の重要な意味を強調している。この問題の続きの部分が他の二つの項目にある。“*Aristotele latino*”（I 367—369）で A. Tognolo は中世のアリストテレスのラテン翻訳について今日知られている所を述べている。“*Aristotelismo*”で G. Di Napoli はアリストテレス主義の歴史を考えているが、その大部分はスコラ哲学の、殊にトミズムの歴史と一致している。そして Di Napoli は充分注意しているが、聖トマスはアヴェロイズムの誤りを避けるために、アリストテレス説の曖昧さを説明し、更に自然主義的注釈からアリストテレスをとり出さなければならなかったのである。Di Napoli によればトミズムはキリスト教化されたアリストテリズムであるよりもむしろ、アリストテレスを媒介として解釈されたアウグスティニズムといわれ得るのである。中世の著者たちをたとえ浅薄によむにしても、アリストテレスに対するスコラ学の奴隷ぶりについての人文主義者その他のいわれのない非難を見破り得るのである。

聖トマス（IV1232—1260）とトミズム（IV1223—1228）とは P. Giacon が書いている。この後者の理論的部分について少し述べてみたい。一般に自分に肯定の理由を与えようと欲するのは哲学にとって本質的なことである。感情的要求に従おうとする人々でさえ、結局は感情的要求に含まれている合理性の要素に基づいているのである。このことを Giacon は主知主義としての非難に答えるためにいうのである。更に彼は抽象主義と合理主義としての非難に答えている。そして最後に問題主義、歴史主義、実存主義、現象学、新実証主義との対話の中で、純粹に考えられたトミズムの可能性への確信を表明している。そして最後に人間の

精神は絶対的な精神ではないのであるから、その精神の光に、啓示の高い光と経験科学の光とが加えられうるのである。

新トミズムと同時に近代の哲学的世界には、精神主義といわれる他の思潮が存在する。この辞典の主な協力者たちの多くはこの流れに属している。

“Spiritualismo” (IV 908—914) の項はG. Santinello が説明している。現代の精神主義者はその起源を聖アウグスチヌスに求め、精神主義の基礎的なテーマは皆彼の中に見出される。現代の精神主義は実証主義に対する反動であり、フランスとイタリアに於て夫々がった性格を持っている。それらは自然主義と科学主義の否定と、形而上学への要求の再確認とに於て一致している。更にイタリアに於てはイデアリズムに対して活潑な闘いを行っている。

F. Sciacca は精神主義者は「新スコラ学」の名の下に包含さるべきであると論じている (cf. *La filosofia hoy*, ed. hispana (1956) P. 410 n. 1)。用語の問題は別にして、これらの著者たちのアウグスチヌスとアウグスチニズムとの連絡は否定し得ない。これらの人々も又 (新トミズムと並んで) 中世哲学の現実性と生命性を示すものである。

Sciacca 自身聖アウグスチヌス (I 86—111) の項を書いているが、彼は以前にそれについて著作している (S. Agostino, Brescia 1949)。更にアウグスチニズム (I 78—85) の項があり、その歴史を A. M. Moschetti が考え、その学説を G. Bonafede が考えている。Moschetti はアウグスチニズムの共通的な一般的思潮と同時に、その非常に多様性を見出している。中世における最も純粹なアウグスチニズムは聖ボナヴェントウラの学説である。今日の理論的実存主義 (キエルケゴール, K・バルト, シェストフ) はプロテスタント的アウグスチニズムといわれる面を逆説的にまで誇張している (即ち罪の意識, 信仰のみによる救い, 禁欲, 人間理性の蔑視)。逆にカトリック的アウグスチニズムは生の神的価値と人間的価値を具体的に把握し、大ならしめることを目指している。Bonafede はアウグスチニズムの特徴を、人間 (*totus homo*) が精神的現実の生きた意識に於て、照明に於て、内省に於て、歴史性の意識に於て行う真理の追求に認めている。

フランシスコ会について本を書いている同じ Bonafede (*Il Pensiero francescano nel sec. XIII*. Palermo 1952) が、その問題についての項目を書いている (II 517—519)。この学派には同質の学的体系は見出されない。その統一はむしろ、それによって活気づけられる精神、即ち具体性に対して敏感であることに負っている。従って実際の追求の中における理性と信仰、哲学と神学の内的統一が求め

られる。その頂点は観想である。この学派の主な著者たちは聖アウグスチヌスの照明説を受入れるか、又は文字では従わなくとも、その精神を生かしている。

聖ボナヴェントウラの項目では (I 744—760) L. Veuthey がすぐれた論文を書いている。彼も又この聖博士について以前に著作をものしている (S. Bonaventurae Philosophia christiana. Roma 1934)。もう一人の専門家 E. Bettoni (Duns Scotus. Brescia 1946. etc.) はドゥンス・スコッス (IV 463—472) とスコッス学派 IV462—463) の項目を書いている。スコッスはアウグスチヌスの伝統をアリストテリズム的方法で豊かにしようと試みた。今日スコッスの著作に問題があって多くの学者は彼の思索の内的な脈絡を疑っている。恐らく他の著者たちよりも一層、スコッスは今日の研究努力を要求している。スコッスは教えるよりもむしろ、人を考えるように刺戟するのである。

アラビアの著作家たち (これはもっとも広い意味でいうのである、というのは厳密な意味では Al-Kindi を除いては皆アラビア人ではないからである) とユダヤ人の哲学の、キリスト教中世哲学に対する意味は益々研究され認識されなければならない。これらの問題についても又この辞典に多くのすぐれた研究が見出される。

“Arabi” (I 313—320) なる一般的項目を、当時ペイルート大学教授であった E. Lator とこの問題について多くの論文を書いているオクスフォード大学教授 R. Walzer が書いている。Lator は一般的問題と神学的思弁を述べており、Walzer は固有の意味の哲学的問題を扱っている。アラビア人たちはギリシア文化を消化し (それは決して一様ではなかったが)、その哲学を使用して、イスラムの著作家たちの重大な諸問題を解決するに努めた (即ち哲学と啓示、靈魂の不死、肉体の復活、創造、預言等)。キリスト教的スコラ学の問題との類似は明かである。

この辞典には多数のアラビア人のことが書かれているが、就中キリスト教中世に最大の哲学的影響を及ぼした二人のことが書かれている。

Averroes (I 508—521) についてはケンブリッジ大学の Teicher 教授が書いている。彼はアヴェロエスの学説を十分に説明した後、キリスト教中世へのその影響を考えている。この人の影響は二重である。即ち積極的なもの (アヴェロイズム) と消極的なもの (というのは論敵たちに自分たちの立場を方法的に明白に定めるように強いたから) である。Teicher によれば彼を異端で無神論者と考える見解は恐らく、近代の歴史家たちの見解よりも勝れている。“Averroismo” とい

う特別な項目 (I 521—523) は G. Quadri が書いている。

Avicenna e Avicennismo (I 525—535) については A. M. Goichon が書いているが、彼女はこれらの問題について多くの論文を出版している。医学に対するアヴィケンナの影響は多くの世紀を通じて偉大であった。哲学に於いてそれほどではなかったが、早く始まって長く続いた (むしろその術語の或るものがトミズムの中に用いられたことによって、その影響は決定的になったといわれ得る)。一世紀の間新プラトンのアウグスチヌスの線上に於てアリストテレスを補うものとして無制限の賞讃を博していたが、キリスト教との類似による賞讃の後に、非類似性による批判が始まった。最も大きな影響は本質と実存の差別の問題に於てであった。聖トマスは *De ente et essentia* の中でしきりにアヴィケンナを引用し、又表現方法そのものに於てその影響は明白である。その後引用は次第に減った。というのはアヴィケンナは既にそれ以上の思索に対して十分な基礎を提供し得なかったからである。しかし結局ラテンのスコラの始まりはアヴィケンナなしでは考えられない。アヴィケンナの影響は受入れられた、或は反駁された学説に於て明白である。

ヘブライの哲学 (I 1784—1786) とその主な著者たちの中 Sa'adyah (IV 263), Ibn Gebirol (Avicbron) (II 1160—1163), Maimonides (III 247—249) について E. Bertola が書いている。彼はこの問題について出版している (*La filosofia ebraica*. Milano 1947)。ユダヤ人たちはアラブ人よりもよりよく、そしてより以前に啓示とギリシア哲学との関係の問題を考えている。Sa'adyah は殊に信仰と理性の調和を扱った。ヘブライの新プラトン派の中で最も深い Ibn Gebirol はヘブライの観念に新プラトン主義をあてはめ、キリスト教の作家たちに影響を与えた。ヘブライ哲学全歴史上での主要な著者 Maimonides はペリパテチコス派の哲学に宗教的な解釈を与えた。周知の如くアルベルトス・マグヌスと聖トマスはマイモニデスの中にアラブ的思索よりよりよいもの、有神論的アリストテリズムのために開かれた道を見出したのである。

以上中世哲学の問題に直接関係あるいくつかの項目からわずかのことを述べた。しかしより一般的な項目の中に非常に重要な多くのものがある。というのは如何なる重要な問題もそれについて偉大なスコラ学者たちが、殊に聖トマスが何を考えたか、を明白に述べることなしには、扱われていないからである。

人間の仕事に於てすべてが完全であることを望むべきではなく、殊にこのような大きな困難な著作に於ては当然なのである。例えば “Accidente” の項目で偶

有についてのスワレスの説を述べている所では、[このことは“*Modo*”(Ⅲ651—654)の項目についてもいえるのであるが] スワレス説と、スワレスをこの見解に導いた動機との真の理解を示していないように思われるのである。スワレスは偶有を単なる *ens quo* と考えなかったが、内的 (*intrinsecus*) 形相と考えた。そして又実体を偶有の単なる基体 (*substratum*) に還元することも決してなかった。スワレスの見解の理由は *Ferro* が考えている所のものではなく、偶有の分離可能性の問題である。それは他の考え方では十分に解決せられ得ないと考えられていたのである。我々も又、もし分離可能性が救われるべきならば、スワレスの見解は受け入れらるべきであると考ええる。しかしもし *Echarri* (*Philosophia entis sensibilis*. Barcelona 1959. pp. 253 ss.) が根拠なしにではなく考えているように、分離可能性が必要とされないならば、その時にはトミズムの見解が選ばれるべきであると思われる。しかしこの辞典に於ては分離可能性は救われるべきであると考えている。

しかしこれらの些少の瑕瑾はこの辞典が中世哲学のあらゆる研究者に与える有用性に比すれば全く問題にならないといってよいであろう。(小山宙丸訳)

Institut International de Philosophie. PHILOSOPHY IN THE
MID-CENTURY.

A SURVEY. Edited by R. Klibansky. Firenze (La Nuova Italia)
1958—59. 4 vols. : I Logic and Philosophy of Sciences XI—336 pp. ;
II Metaphysics and Analysis 218 pp. ; III Values, History and Religion
232 pp. ; IV History of Philosophy. Contemporary Thought in Eastern
Europe and Asia 330 pp.

Francisco Pérez Ruiz, S. J.

文献的報告といったものは、それができるだけ完全なものであることが大切であるが、またそれがいかに困難なことであるかも周知の通りである。Institut International de Philosophie は上記の4巻において、ある時期すなわち1949年から1955年にかけて出版された哲学的研究の系統的な概観をわれわれに提示してい